

尼崎本萬葉集解說

尼崎本萬葉集について

澤瀉久孝

本書は縦凡八寸四分、横凡四寸七分の大和綴の冊子本である。用紙は雲母引の斐紙、墨附三十八枚、無丱で一面七行、題詞を低く、歌を高く、平假名の訓を別提して全部一筆である。長歌には訓を附せず、短歌にも附せざるものあり、一行分のところへ平假名の訓を二行に書いたところもある。朱の書入、校異があり、全部朱筆の片假名で漢字の傍に訓を附したものもあり、平假名の訓の一部を朱筆の平假名或は片假名で補つたところもある。それ等の朱筆も本文の墨書と同筆かと思はれる。奥書は無く、筆者時代不明で、本書の出所についても岡山縣倉敷の某家とのみで、くはしい傳來を聞く事も出來ないが、從來尼崎切と呼ばれてゐるものと用紙書式を同じくしてゐるので、同じものと認め、佐佐木博士の御説に從つて尼崎本萬葉集と名づける事にした。從來の尼崎切は卷十二の斷片のみで筆者を俊頼とは無く本文のうち傳へてゐるが、此度の卷十六は筆者を異にしてゐる。ともかく王朝末期か鎌倉中期頃までのものかと思はれる。目錄

国語研究室 116066 図書

（三八〇一）墨之江之岸野之榛丹丹穗所經迹丹穗葉寢我八丹穗氷而將居

より

（三八〇三）隱耳戀者苦山葉從出來月之顯者如何

右或曰男有答歌者未得探求也

まで一枚分だけの落丁がある。その前のところに綴違があるのは右の落丁の生じた後綴直したものと考へられ、今ついてゐる遠州綴子萌黄地唐草模様の表紙もその頃加へたものと思はれる。

本文の異同に就いては、先づ他の諸本に見えない點で、特に注意せられるもの一二をあげれば

（三七八七）妹之名爾繫有櫻花開者常哉將戀彌年之羽爾

の「花開者」が本書に「花散者」となつてゐる事である。そのいづれが是であるかの問題は暫く措き、諸本に開者とありながら舊訓に「ハナチラバ」とし、古葉略類聚鈔其の他の寫本にもチラバとある、その訓の因つて來るところを本書によつて知り得られる事を面白く思ふ。また竹取翁の歌の結句

（三七九一）古部之　賢人藻　後之世之　堅監將爲迹　老人矣　送爲車　持還來（持還來）

と本書にはくりかへしがついてゐる事である。これまた諸本に見ないところであるが、卷末の乞食者詠の二つの長歌の結句のくりかへしと對照して、やはり原本にはあつたものと認むべきではなからうか。それは卷十三の（三二五三）の長歌の結句「言上爲吾」が元暦本、天治本、類聚古集にくりかへされてゐるのを佐佐木博士の白文萬葉集、新訓萬葉集に採用されてゐると同樣に扱はるべきものかと思はれる。

右は全然他本に見えない點であるが、その他の異同に就いて見るに、類聚古集と古葉略類聚鈔——そのうち特に前者——との共通點が認められる。たとへば

（三八四五）造駒土師乃志婢麻呂白。久有者諸欲將有其黑色乎

の「白久」が本書と類聚古集と古葉略聚鈔との以外の諸本に「白爾」とある。これは本書によつて諸本を訂正すべき一例である。

（三八一〇）味飯乎水爾醸成吾待之代者曾無直爾之不有者

の代が本書と類聚古集とにのみ「伐」と誤り

（三八六二）志賀乃山痛勿伐荒雄良我余須可乃山跡見管將偲

の「伐」が本書と類聚古集とにのみ「代」と誤つてゐる。しかも本書は前者の「伐」の右に朱で「代」と訂し、後者の「代」はその上に朱筆を加へて伐と直してゐる事が注意せられる。なほ後者の傳は本書と類聚古集とにのみ「思」とある。かうした兩者のみの共通點はいくつも擧げる事が出來るが、その類似の書も著しい一例をあげれば

（三八八五）伊刀古　名兄之君　居居而　物爾伊行跡波　韓國乃　虎云神乎　生取爾　八頭取將來　其皮乎　多多弥爾
刺　八重疊　平羣乃山爾　四月與　五月間爾　藥獵　仕流時爾　足引乃　此片山爾　二立　伊智比何本爾　梓弓　八
多婆佐弥　比米加夫良　八多婆佐弥　宍待跡　吾居時爾　佐男鹿乃　來立來嘆久……

の「虎云」が本書と類聚古集とに「麂者」とあり、八頭の「八」が本書は「ハ」とあり、類聚古集に「以」とあり、「多多彌爾」の「爾」が兩書に脫し、「二立」が兩書に「二走」とあり、「何本」が「河本」とある。これらの事實より本書の底本としたものが、類聚古集と底本としたものと同系統のものであつたと認めてよいやうである。しかも本書には右の誤字のうち「ハ」の右に朱で「八」と訂し、「河」の右に朱で「何或」とあり「多多彌」の「彌」の右には朱で「祢」とある。「多多祢」の語は卷十五に

（三七二四）君我由久道乃奈我氏乎久里多多祢也岐保呂煩散牟安米能火毛我母

とあつて、その場合の「祢」が古葉略類聚鈔に「弥」とあるにより、「タタネ」の語を否定する學者もあるので、それと思ひ合せて本書の朱筆は注意せられるのであるが、今の場合は音數の上からこの校異にはなほ疑問が殘される。然しそれよりも注意すべきは右の例中の「來立來」が本書と類聚古集とに「來立」とある事である。既に代匠記に「下の來は衍文」とし、諸註これに從ひ新訓萬葉集にも「キタチナゲカク」と訓まれてゐるが、これはまさに本書によつて訂すべきものである。

右の長歌の一例についても察せられる如く、本書そのものを類聚古集の編者がよつた底本とは見られないが、兩者の底本は同一系統のものであり、且本書は類聚古集の編者が見なかつた本によつて校合してをる事が認められる。しかもその校合は一本でなく、數本によつてゐる事は、（三八二二）の題詞に

等歌曰

とし、その「等」の右に朱で「眞」とし、更に下に朱で「一本古哥曰」としてゐる事によつても察せられる。等、眞、いづれも「古」の草書よりの誤――現に元暦本には古を等に、又等を古に誤寫して書き改めた　例　（四三二一）（四三九八）がある――と思はれるが、今の場合は本書筆者の誤でなくして既に底本に等と誤り一本に眞とあり、他本に

古とあつたものと思はれる。

（三八四一）佛造眞朱不足者云々

の右傍に朱筆片假名で

ホケツクルマタニタラスハ　江

とあるは、古葉略類聚鈔に「マタニ」とあると同様であるが、「江」とあるは所謂江家本の訓によつたものたる事を示すものであるが、その他に書入で注意せられる事は

（三八七六）豐國企玖乃池奈流菱之宇禮乎採跡也妹之御袖所沾計武

の菱の右に朱で「蔆イ」とあり、京大本にまた左に赭で「蔆イ本」とあり、右にあげた（三八二二）の題詞の下に京大本また赭で「或本眞歌曰」とある事で、これによつて兩者に見える一本が同系統のものである事が察せられる。

なほ今一つ注意すべき點をあげれば

（三八一七）可流波須波田廬乃毛等爾吾兄子者二布夫爾咲而立麻爲所見

の「立麻爲」が類聚古集に「立豆麻爲」とあり、本書には「立了麻爲」とあり、右に朱で「在」とある事である。

これは

（三八二四）刺名倍爾湯和可世子等櫟津乃檜橋從來許武狐爾安牟佐武

（三八三二）枳棘原苅除曾氣倉將立屎遠麻禮櫛造刀自

の「來許武」「除曾氣」と同じく「在麻爲」とある文字の重複と見るべきではないかと私は思ふ。これは類聚古集、古葉略類聚鈔などの寫字態度と共に攷究に値する點で、それらの問題や、本書と元暦本との關係に就いても述べたいと思ふが、それにはそれら古寫本そのものに就いて少し詳しく述べる必要があるので、その事は他日を期したいと思ふ。

以上述べ來つたところによつて本書の古寫本としての系統、價値をほゞ明かにし得たかと思ふ。卽ち本書は卷十六の古寫本としては最も古いものであり、西本願寺本、神田本、溫古堂本、大矢本、京大本など今迄に知られてゐた古寫本がいづれも仙覺本系統のものであると違ひ、類聚古集、古葉略類聚鈔と共に、仙覺律師の手を經ない萬葉の姿を見るべきものであり——（三八四六）（三八四七）（三八七一）など本書に無點の短歌がまた類、古兩本に無點のものである事も注意せられる——本書の底本としたものは必ずしも善本とは云ひ得られないが、然もなほ本書によつて、從來の諸本の誤を訂正すべき點もあり、特に類聚古集などよりも多くの異本によつて校合を加へたものである事は本書

の校合本としての價値を重からしめるものといふべきである。

終りに本書を京都帝國大學國語研究室の藏本とすることを得たのは、一にその購求にあたり多大の援助を與へられた生田耕一氏の厚意によるものである事を記して深く感謝の意を表する。

尙、此の玻璃版複製本は原寸に撮し、裝釘も舊體のまゝにしたが、表紙は原物を摸造せずに簡單な紙を用ひた。又本書の朱書は印影の上に於てやゝ色薄く寫つてゐる事を御判讀願ひたい。

（昭和七年八月）

国立国語研究所
1001344728